

1. 知人宅から移築された瓦葺き門から続く石畳の先に母屋の入口がある 2. 琵琶湖の茅を使って京都・美山の職人が葺いた見事な茅葺屋根の母屋 3. 二人の当時生活が偲ばれる土間 4. 母屋の廊下で撮影された二人 5. 妻正子が筆を走らせた書斎



二人の世界観が宿る 旧白洲邸・武相荘

激動の時代を駆け抜けた白洲次郎と随筆家であり町田市名誉市民にも顕彰された妻正子の終の棲家として、夫妻の精神が今も息づく武相荘。二人が愛したこの土地と庵の歴史は72年前から始まった――。

特集◎ 町田の夏

旧白洲邸・武相荘(きゅうしらすてい・ぶあいそう) 町田市能ヶ谷7-3-2 042-735-5732 10時～17時(入館は16時半まで) 入館料1,050円 <http://buaiso.com/>

瓦葺き門をくぐると、木々に遮られた優しい日差しの中に茅葺屋根のどっしりとした佇まいが目飛び込んでくる。玄関口に何気なく飾られた季節の花々も美しい。武相荘は戦後、連合国軍占領下の日本でGHQとの折衝の矢面に立ち、「従順ならざる唯一の日本人」と異名を取った白洲次郎と、随筆家である妻正子の邸宅である。武蔵と相模のちょうど境にある立地を自身の無愛想にかけて自らが命名したものだ。

1902年、兵庫県武庫郡精道村(現・芦屋市)生まれの次郎は17歳でケンブリッジ大学に留学し、26歳までイギリスで過ごす。帰国して英字新聞の記者や貿易関係の仕事に就くが、日本の敗戦とその後の食糧難を予想し38歳の若さで突如仕事を辞め、1943年にこの地へ移住した。農業に勤しむ日々を送っていた戦争末期には召集令状も届いたが、東部軍参謀長である辰巳栄一に頼み込んで召集を逃れたという。

終戦直後、外務大臣となった吉田茂の要請で終戦連絡事務局参与となり、堪能な英語を駆使しGHQとの折衝役となった。その後、吉田内閣が発足すると貿易庁長官となり、1951年9月にはサンフランシスコ講和条約調印式へ同行。外務省が用意した美辞麗句ばかりが並んだ英文の受諾演説原稿に激怒し、自ら演説文を日本語で書き換えたのは有名な話だ。

茅葺の母屋をはじめ、ガレージ、裏の竹林などが当時に近い状態で綺麗に保存されている。母屋には多くの随筆を書き上げた正子の書斎や好んで使った食器、着物の他、有名な次郎の遺書、大量の蔵書なども展示され、二人の生活をうかがい知ることが出来る。2001年に記念館としてオープン以来、遠くからも大勢の人が訪れ、昨年にはレストランもリニューアルされた。

終戦70年を迎えた今年、ノスタルジックな雰囲気の中、戦後処理の為に奔走した白洲次郎に思いを馳せてみるのもいいかもしれない。

企画展「武相荘の夏」
8月23日(日)
月曜定休 ※祝日は開館